

## 審査の結果の要旨

氏名 三輪聡子

本論文は、読み物資料を用いて道徳的な価値について理解を深める小学校道徳の授業において、資料における登場人物の動機の読み取りの個人差に焦点を当て、児童の学習過程とその学習への支援のあり方を、認知心理学におけるアナロジー推論の枠組みを用いて、検討を行った研究である。論文は、全4部10章から構成される。

第I部第1章では、道徳教育に関する研究上の課題を概観した上で、資料理解において児童の個人差の生起メカニズムの検討の必要性、資料と児童の生活経験を関連づける支援方法の必要性という課題を導出している。続く第2章では、アナロジー推論に関する研究を概観し、前述の課題解明のために、道徳の時間における学習過程は、既知の事柄（自分の経験）から未知の事柄（資料の登場人物の不可視の動機）を推測する、アナロジー推論の枠組みで分析することが有効であると論じている。そして第3章では本研究の目的と具体的な研究課題や方法を整理検討している。

第II部では、動機の読み取りが読み物資料解釈に与える影響を実証的に検討している。第4章（研究1）では、小学校6年生1学級（ $n = 34$ ）を対象に、物語解釈課題を実施分析し、動機の読み取りが物語解釈に影響を及ぼすことを明らかにし、第5章（研究2）では、動機の読み取りが不十分であった児童1名への教師の支援を分析検討し、アナロジー推論に用いるソース（推論の基盤）を作らせることで、ターゲットとなる登場人物の動機を抽出させる支援を教師が行っていることを示している。また第III部では、アナロジー推論が動機の読み取りに与える影響について、準実験と事例分析により検討している。第6章（研究3）では、アナロジー推論例を与える支援方法の効果と、物語と類似した状況を想起させる支援方法の2つの方法の効果を検討している。そして、アナロジー推論例を提示する支援が効果があること、一方児童自らが類似性を見出し想起する方法は、アナロジー推論を達成するための適切な足場かけとしては効果を見出すのが難しいことを明らかにしている。続く第7章（研究4）では、小学校6年生3時間の道徳授業における児童の類似状況の想起経験の内容分析から、児童の中には資料解釈において読み取った動機を含めずに物語を構造化しその構造化をもとに経験を想起したり、物語と自分の経験とを結びつける際に、動機などの不可視の要素を見落とす可能性があることを明らかにしている。また第8章（研究5）では、小学校6年生5時間の道徳授業を対象に、教師がどのように動機の読み取りを支援しているかを談話分析から検討し、教師は児童の行う未完成なアナロジー推論を促すために、不可視の動機の部分を明確化させる方略をとっていることを明らかにしている。第9章（研究6）では、動機の読み取りのために適切なアナロジー推論が学級で共有される際の相互行為を、児童のワークシート分析から検討している。そして、児童間でアナロジー推論の内容を共有することにより、新しい共通項を発見するといった、道徳の授業での、他者に開かれたアナロジー推論の特徴も明らかにしている。

そして、第IV部第10章の総合考察では、6研究の知見をもとに、道徳の時間に生起するアナロジー推論の過程モデルを提示し、本研究の意義と課題を論じている。

本論文は、道徳の授業を、アナロジー推論の枠組みから分析検討するという独自の着想により、授業分析への新たな研究の可能性を拓く実践研究と高く評価できる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに、十分にふさわしい水準にあると判断された。